

設備等を更新した学術研究船「白鳳丸」による緊急調査航海の実施

概要 要:老朽化が著しい「白鳳丸」のエンジン等の主機関の換装や研究環境整備を実施したことで研究船としての機能を維持し、令和6年能登半島地震発災直後の緊急調査航海により、海底地形データの収集等を実施した。

対策名:98 国立研究開発法人施設等のインフラ整備対策 <5か年加速化対策>【文部科学省】

■ **実施主体**:国立研究開発法人海洋研究開発機構

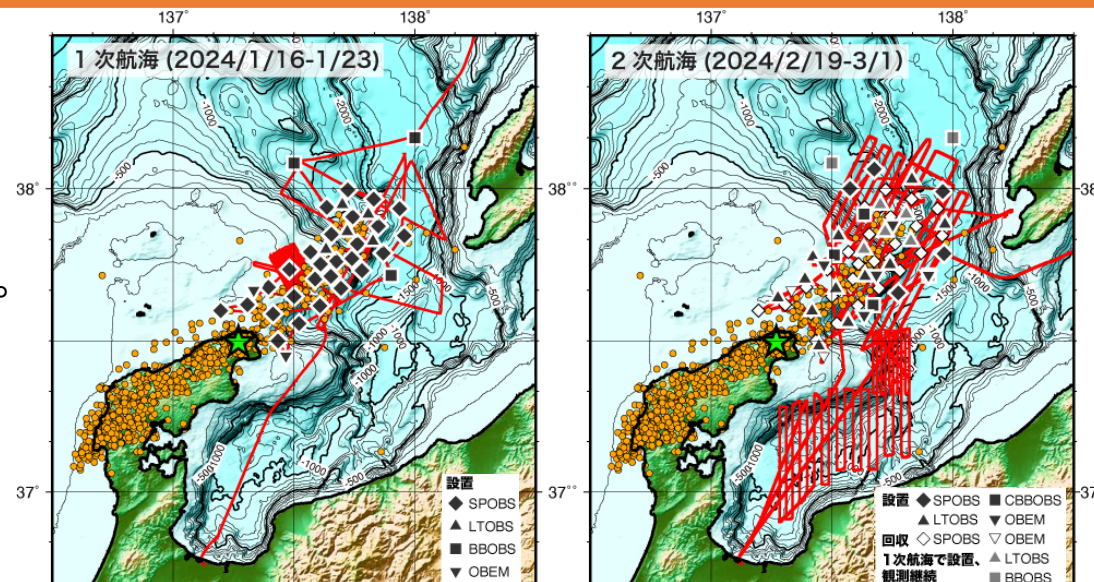
■ **緊急調査航海の実施場所**:能登半島北東沖

■ **事業概要**:学術研究船「白鳳丸」は約4,000トンの大型研究船で、大学共同利用による汎用調査船として、各種の研究室・観測設備があり、近海・遠洋を問わず世界の海を舞台として、長期間の多目的研究航海を実施している。令和元年時点で建造(平成元年引渡)から30年が経過し、主機関等は特に老朽化が著しく、船舶の機能喪失・火災などのリスクを抱えていた。そのため、船舶としての機能を維持し、本船を安全に運用するために「白鳳丸」の主機関(エンジン)の換装及び配管等の整備を実施。また、研究船としての機能を維持すべく、音響観測装置の換装等の研究環境整備を実施した。

■ **事業費**:37.8億円

事業名	事業費	実施期間
「白鳳丸」の改造	37.8億円	R1~R3
うち5か年加速化対策 (加速化・深化分)	2.8億円	R2

■ **効果**:能登半島地震発災直後(第一次航海:令和6年1月16日~23日)に緊急調査航海を実施できた。第二次航海(令和6年2月19日~3月1日)とあわせて、海底地震計26台を設置・回収し、観測データを収集するとともに、地震直後の震源域周辺の詳細な海底地形データを収集した。収集した震源メカニズム等の解明に有用なデータを、地震調査研究推進本部や石川県防災会議震災対策部会等で報告した。



緊急調査航海(一次・二次)の調査海域図

赤線—はそれぞれの航海の航跡。★は1月1日M7.6の地震の震央。●は気象庁による2024年1月1日の震源分布。地形データは、日本海洋データセンター及び国土地理院のデータを使用。



学術研究船「白鳳丸」



能登半島沖での
海底地震計(OBS)投入の様子